

# 大学教育の課題を

## 日本の教育課題として捉える

杉江 修治

すぎえ・しゅうじ  
中京大学・教養学部

大学の大衆化に伴い、学生の質が変わったといわれて久しい。その変化は、大学生の学力低下に関する議論の過程でも明らかになったように、従来は大学に入学してこなかった層が入学するようになったというような量的な問題ではなく、すべての学生の資質にかかわる構造的な問題である。学生をどのように教育するかという取り組みに関しては、文部科学省だけでなく、実際に学生を目の前に行っている大学教員の側にも内発的な動機が強くある。

教育の実効をあげようと、大学はカリキュラムの改革を重ねてきた。しかし、学生の、学びの方法、学びへの態度といった幅広い意味での学力不足に対応するには、教える内容だけでなく、それを伝える工夫も必要だと考えられるようになった。

ただ、大学は、高校卒業というキャリアを持った学生たちの、現状の学力を踏まえた教育を準備するという発想だけでいいのだろうか。広い意味での学力の低下、勉強への不適応の根源に

も目を向ける必要はないだろうか。

大学で主流となっている指導法は一斉講義方式である。この方法は、受講生に内的な学習意欲があれば、内容が論理的に効果よく示されていくという点で有効性を持つ指導法であり、安易に否定されるべきものではない。むしろ二十歳前後にもなつて、一斉講義方式に適應できないということの方がおかしな話である。教育心理学には、適性処遇交互作用という用語がある。これは、学習者一人ひとりにとって学びやすい学習方法があり、個に応じた学習方法が提供されることによってより高い習得が期待できるという事実を示す用語だ。学生に応じたきめ細かな指導の必要性を示唆している。ただ、社会に出たときには、学習者本人が自ら学び方を選択できる機会はむしろ少ない。会社で受ける研修が一斉講義方式だったとして、それに新入社員が注文をつけるなどということは考えられないだろう。与えられた学習方法に適應する力も学力なのである。

今の大学生に合わせた授業を工夫するということは、現状を踏まえれば必要であろうし、正しいのだろう。しかし、「入門ゼミ」などで扱う、学びの構え作り、学びの方法の習得などは、入学前にその相当部分を済ませておくことができないのだろうか。小学校、中学校、高校の教育にもっと期待できることがあるのではないだろうか。

学生たちには課題が多い。ノートを写すことが授業を受けることであり、自分が理解できることだけを記憶にとどめて理解できないことがらは聞き流し、自らが変わるために授業に臨んでいるのだという学びの基本が分かかっておらず、授業中に非社会的な行動が無自覚になされている。学生の多くは、あたかも授業はセレモニーだとも思っているようなのである。国民としての役割や責任といった意識を、学びの姿からうかがうことができない。大学教育でこういった学生の行動、態度の矯正を改めて図つたとして、それは効果的にできるのだろうか。

一九八九年に学習指導要領が改訂された折、「新しい学力観」が打ち出され、教育の目標は知識、理解より、意欲、態度といった学びへの積極的構えづくりにあるという見解が出された。それ以降、さまざまな実践の試みがなされたが、学校教育の実態は大きくは変わらなかつた。二〇〇二年度から実施に移された最新の学習指導要領では、文科省がしびれを切らしたのか、「総合的学習の時間」という、学びの方法を習得させる教育機

会を、相当の時間を割り当てての形で設けた。筆者はこの決定に全面的に賛成というわけではないのだが、子どもたちの学びの中身をより有意義なものに変える試みだとは思っている。しかし、最近にいたつて、文科大臣は目先の学力に魅力を感じていくような発言をしばしば行い、古い学力観を復活させんばかりの動きを示している。おかしなことが起きているのである。

大学の学生たちは、それ以前の初等教育、中等教育の経験をもって入学してくる。しかし、興味、関心を深めるために自ら本を読むなどという態度が形成されている学生が極めて少ないということなどは、それまでの修学期間の長さを考えると異常なように思われる。大学における学問の機会を、効率の悪い矯正教育に費やすのでなく、学生たちが入学する前に、学びに対する適切な態度や、効果的な学習をするための方法、自ら真摯に伸びようとする意欲などを予め育てることは不可能ではないはずだ。適切な教育の方向づけを見出ししていく必要がある。

大学に至るまでの日本の教育に対しても、本質的で健全な見解を、教育に携わる者としての大学人が持ち、発言をしていくことは大学教育を変える重要な行動だと思ふのである。